

「大地・食べもの・からだ」 99年度畜産堆肥リサイクル協会総会静岡日興（99年6月3日）

今日は、ビデオをみていただくのが主な目的ですが、内容に反映している作者の気持ちをよりよく理解していただくために、少し奇妙なお話をさせていただきます。

本題はみなさんの体がどんな影響を受けて昔できてきたのか。それが今の体と違っているのか。ということです。受けてきた影響とはどんなものかも大事な話題です。昔とって も100年や200年のことではなく、数千年から一万年昔のことです。影響の因子は大地で象徴される環境や食物などがあげられます。

人を含め動物は2大器官群、つまり胃腸器官系と脳神経系をもっています。ビデオは胃腸器官系の話です。食物の話です。昔の食物のことは或る程度わかりますが、昔のヒトの胃腸 器官の働きと環境との関係がどうであったか、殆どわかっていません。そこでビデオの話は余り自然科学的ではないのです。又内容は普段忘れていた世界の事です。そこで、今日は 体のうち脳神経系のココロを取上げて昔を先ず思いだしていただこうと考えました。

脳の働きはすぐ精神活動と結びついて考えがちですが、動くとか食べたいとか、いい匂いとかいった感覚的な事柄も脳の仕事です。ココロの話も勿論脳の仕事です。前座の話がどうしてそうなのか。明治以来西洋から輸入した科学は、自然科学の分野で大変発達しました。でもココロについては未だです。脳科学は今先端科学ですが、まだココロに立ち入った研究は不可能です。まして二千年前のヒトのココロがどうだったかなど、解明できる筈はありません。ところが人文科学では昔のヒトのココロと環境との関係の研究が進んでいます。これが前座にココロの話をするわけです。

日本人の消化器官が農業（含畜産）や漁業の収穫物の影響をつよく受けているのに、ココロの世界は森林の影響を大変強く受けている、これが結論です。

日本は世界でも珍しい森林国です。今も国土の3分の2が森林です。農業のため森林破壊が起こるのは弥生文化が始まる少し前ですが、それまでは今の関東平野も濃尾平野も みな森林だったそうです。弥生時代は2200年前から始まるので、それ以前の日本人は森林の中に住んでいたことになります。この縄文時代は12000年前から始まるそうですから、少なくとも1万年間は森林の中に住んでいたことになります。更に文化が発生する前、恐らく10万年間以上、我々の祖先はこの日本という森林国に住んでいたようです。日本列島がアジアから離れて弧状の列島となったのは1500万年前ということですから、歴史 はもっと遡れるかもしれません。そんな森林の影響を日本人のココロはどう強く受けているか。これが中心的な話題です。

森林の意味をわかりやすくするのに、これの反対語に砂漠を選びます。砂漠は、ヒトが森林を破壊し、自然な修復が短期、例えば千年では地形的に不可能のような場合にも誕生しますが、大抵の砂漠は、降雨量、風、日射などのせいで、どうしても出来てしまったものです。

概して砂漠はヨーロッパには大変に多かった。一方東洋は森林に蔽われている地域が多 かった。こういった区分けで、「森林の思考・砂漠の思考」という面白い本を私と同輩の鈴木秀夫東大教授は書い

ておられます。「ヨーロッパ人の多くは砂漠に住んでおり、彼らのココロの在り方に砂漠の民の考え方といえる特徴がある。一方東洋人には森林の民の著しい特徴がある、」これが何千年もそんな環境で暮らしてきた結果と見るのです

人のココロの在り方はその人がどんな神様を信じるかで、かなりわかる、そう言われてみれば当然です。ヒトはホモ・サピエンスという一つの種族なのに、多数の宗教があるのはご存じの通りです。

少し漫画的な省略の仕方で話をすすめます。信心深い方には失礼ですが、ちょっとクールに見るとこうなるということでお許し下さい。

ヒトにとって何が大事か、当然食物です。それが植物からくるのもおわかりいただきましょう。牧畜だって、家畜は植物を食べなければならないし、狩猟といったって獲物の動物は植物を食べています。ごく僅かですが、回遊魚が元手というのものもあるかもしれませんが、例外です。だから植物が生えている場所でなくてはヒトは生きられない。植物が生えるには大地と太陽だけでなく、水がなくてはいけない。そこで水がどこからくるか、が住人の関心事になります。

エジプト人はナイル川の縁で暮らしていたから、川水の安定を願い、先ず神を川に見付けました。やがて川を支配する太陽に神を見つけました。こんなエジプトでは、年に一度は雨があって、水位を高めてくれるくれました。そのせいか、彼らのココロの在り方はここで止まって、次のイスラエル人ほどにはならなかったようです。

さてイスラエルでは環境が違った。イスラエルの民はサワラ砂漠の周辺の僅かな土地で、しかも他の農耕民族の土地の縁でロバを元手に暮らしていました。ロバの乳を農作物と交換して暮らしていたのです。だからロバの餌となる草が元手で、草が生えるためには降雨があるのが大事です。不幸なことにイスラエルは気象上、気候が不安定な位置にあった。イスラエルは雨を呼ぶ前線の端にあって、前線の上下がその年により不安定で、嵐がきたりこなかったり、そんなことから雨を呼ぶ嵐の到来を願う、「嵐の神」さまに先ず頼った。

気象前線の移動で気ままな「嵐の神様」は、エジプトの太陽神より、強くヒトを左右したのは当然でしょう。気ままな美人に人気が集まるのは、皆様、その昔経験されたことでしょう。そんな神様を強く引き止めたいという強い願いが、砂漠の縁に住むイスラエル人にはあった。だからユダヤ教にしる、キリスト教にしる、「貴女だけが全てです」、と告白するようになり、唯一つの神「エホバ」を信じる一神教が生れだと考えます。エホバの神は正に絶対神である必要があったわけです。

それに彼らは砂漠をラクダで旅することが生業でした。砂漠の中で迷ったら決断が生死を決めます。誤れば死、これは神の御心と考えざるをえません。こうして自分を越えるもの、自分を生み出したものを唯一の神と考える傾向が強まったことでしょう。砂漠という環境に住んだ民は他の神の存在を認めず、排除する一神教であったのは、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教などから明らかです。

仏教を生んだインドのアーリア人の場合は大分違います。先住民であるトラヴィダ人は焼畑で農耕をしていたが、乾燥のため農耕を放棄した。その後に入ったアーリア人は遊牧の騎馬民族だったが、やがてインダス川の川べりの僅かな地で農耕の定住生活を始めた。住みにくいところに入った彼らは当

初から問題を抱えており、当然森林を焼き払う。そのために必要な「火」を崇拜し、神としました。

彼らが住んでいたところは焼き畑の跡、いわば、周囲を森に囲まれた、森のさけ目です。乾燥化が一層すすみ、焼き付ける太陽のせいで、水が減り、植物が育たない。太陽神の登場です。これはエジプトの太陽神と似ているけれど、川の水を調節してはくれない。いばっているだけです。でも太陽神はその乾燥化を押さえる役として主神となりました。でも彼らは雨をもたらすモンスーンの神も太陽神と並んで信じた。

さてインド人にはもう一つ大事な違いがあります。彼らは水が欲しかったのですが、水を神様にするのはためらった。イスラエルのように予期しないことを起こす、嵐の神のようなものに頼らなかった。彼らは哲学的な人種なのでしょうか、それとも周囲に残された森に入って考えるというトラヴィダ人の習慣を真似ていたせいでしょうか。宇宙にみちみちている、何かを生ぜしめるもの（生ずるものに「水」も入るのですが）、それを信仰の対象とした。これをブラフマンと呼んで、「梵」と言う字で示しました。どうして彼らがこんな抽象的な考えに辿りつけたか。それには森が大事な役を果たしていたと考える方がよいでしょう。森にはとっっても沢山生物がいます。だからそこでブラフマンを感じるのには自然です。

更に人里離れた森に入って思索し、新しく見つけた確かなものは、自分、「我」です。別の言葉では「呼吸するもの」です。これをアートマンと呼びました。「梵」と「我」とが一体になること、これを真理と考えました。仏教の発生です。ここには砂漠的傾向の一神教とみられますが、考え方が極めて森林的な曖昧さをもっています。

森林は曖昧である、これは前にあげた砂漠の中で迷ったときの例を、森林の中で迷ったときに置き換えますと、砂漠と森林の違いが一層はっきりします。森でまよったとき、道を間違へたって平気です。食物はどこにもあります。まちがったため前より良いところへ行く可能性だってあります。桃源郷などという伝説はそんなことを暗示しているのでしょうか。だから森では曖昧だっていいのです。ともあれ仏教のような抽象的な思考はやはり森林というものの存在抜きではどうも起りえないと考えます。

このように見ると、神様、つまりココロの在り方が住む環境に強く左右されているのがよくわかります。勿論、純粋に砂漠的とか森林的とか割り切れないのですが、何千年と住んでいると、環境がココロつまり脳神経系の働きに強く影響します。原則的には今も似たココロを彼らはもち続けています。ココロという聖域も過去の長い期間に、その民族がどんな環境の下にあったかで、違ってくるという考えは正しいでしょう。

さて、日本人のココロと森林の関係です。これについては梅原猛とか安田喜憲という勝れた民俗学者の研究が一般むけ発表されています。この紹介は少し長くなるので、ビデオの後にします。これまでの話で、ヒトの体(今までは脳神経の働きとしてのココロですが、それが長い間受けてきた環境からの刺激で、さまざまに変化してきたことだけは、ご理解いただけたと思いますので、今度は胃腸器官系の話を食べ内容を環境と考えてビデオをご覧ください。

ビデオ

以上は胃腸器官系つまり消化管を中心とした話です。消化というのは単純なことなのに、存外深い

意味がありそうに思います。考えさせる例としてバンツ族の話を加えます。彼らは南アメリカで、大変カルシウムが少ない食事、1日当たり220～440ミリグラムの生活をしているのに、出産は7～8回、常識なら50才になれば骨がボロボロなのに骨粗鬆症はなし。一方現地を離れアメリカに移り住んだ女性は普通の1日800～900ミリグラムのカルシウムを食べても白人なみに骨粗鬆症にかかるそうです。長年同じ食物を食べ続けた南アフリカのバンツ族の消化管は変化していると考えたくなりますね。

もう一つ考えさせる例としてパプアニューギニアの高地人の話があります。彼らは主食がイモ類でタンパク質が欠乏しています。それなのに健康。何故それを克服したか。調べてみると、腸内細菌のなかにアンモニアをアミノ酸、つまりタンパク質に変える細菌がいました。普通なら排泄されるアンモニアを無駄にしていなかったのです。

さてビデオの前のココロの話が続けます。日本の森は照葉樹林が有名です。シイやカシなど関西でよく見る常緑の、葉が光ってみえる木です。西日本から関東にかけての低地がこの木で埋まっていた。東日本ではナラ、ブナなど冬には葉が落ちる落葉広葉樹が平地も、山も支配していたそうです。縄文時代1万年間、今まで2千年です。

1万年間は人口25～35万で、その3分の2が東日本の落葉広葉樹林に住んでいたそうです。どうして暖かい西日本にこなかったか。それは常緑の広葉樹林が大変に付き合いにくかったせいでしょう。当時の道具では、木を切り倒すのも楽ではないし、焼くのだって葉がいつもあってはやりにくい。その点、冬に葉が落ちる落葉樹は扱いやすいし、シイよりブナ、ミズナラなど落葉樹の木の実が良い食物だった。

葉が落ちるといのは、其の期間、別の植物が太陽を使える。そこで常緑林より多様な種類の植物が生える。動物相も複雑になる。人間の狩猟の対象となった動物にとっても餌となるものが増え、彼らも人と同じで、彼らは落葉広葉樹林に多くいた。そんなわけで、1万年間という大変長い間、特に食料に困るといこともなく、木がいっぱいの世界で先祖は暮らしていたことになります。

弥生時代に入れば勿論、焼畑をやって森をこわしますが、それも西日本から、中部地方までで、それから東に焼畑が広がるのは、数百年遅れたそうです。つまり落葉広葉樹林は大変暮らしやすかった、ということです。

日本人のココロはそんなわけで森の中で育ったことが基本だ、ということになります。育ったのはどんなココロだったか、それはついこの間まで残っていたマタギという東北の山間に住む狩猟を生活の糧とした人のそれに似たものだったろうと言われていきます。

マタギのココロには特色は二つあります。第一は生きものは皆同じ生命だということ、中でも木の命を最も尊重しました。第二は生死循環の考え方で、死ぬと魂は肉体から離れ、あの世に行く。あの世でこの世にもどる順番を待つといった、今でいう輪廻の考えかたです。当時は人間はまた人間になると思っていたようで、私などが幼時に「ご飯のあとすぐ横になると、こんど生まれるときは牛になる」と怒られたのとは違います。これは中国の思想が入っているようです。

第一の特色の「動物もヒトも命は対等」では、キリスト教のように「ヒトのために熊がある」とは考えなかった。彼らの関心は熊が必要なときにまたとれることにあったようです。熊を殺し、この世から取りのぞいても、その魂がああの世に行き、そこでこの世の良かったことを思いだして、再びこの世に戻ってきて欲しい、そう願った。だから手厚く吊って、この世に少しでもいい思いを抱かせる、その方がヒト中心の砂漠的思考より重要だった。

森の中は砂漠と違って食物はあっちこちにあります。食べるのに心配なければ、西洋の神様のような絶対神を、われわれの祖先は作る必要を感じなかったのは自然です。こういった、森林が豊富な場所は日本に限らず、多神教が育つ傾向があります。森林的な思考の特徴です。

森を焼き初めて以後の日本人にとって、神様は神道です。これは稲作に関係した儀礼を多く含んでいますが、それでも神道に縄文の影響を強くみる学者は多いようです。

仏教とか、儒教とか、道教とか、それにキリスト教も日本に入っていますが、縄文のココロが強く左右し、日本には一神教が育ちませんでした。日本に仏教が入って、ココロの砂漠化が進行したといわれます。でも安田氏の研究だと、仏教もちゃんと日本化していて、輪廻の思想が強調されているそうです。

砂漠の思考の産物であるキリスト教は、明治以来の努力に関わらず、人口の1%以下です。近隣の韓国が5、6%、他の一神教を合わせて1割りであるのに比べ、大変小さい数です。森林が日本人に与えたココロの特色が現われています。

日本人にとっての問題は輝く太陽が木の上にはあるのに、人は暗い森で殆ど生きなければならなかった。ここに日本人独特の暗い情念が定着したと解釈できます。弥生時代以後平地にでても、一万年間の経験は我らの遺伝子に刻印されている、日本人を暗い民としている、そう学者は考えます。この頃の世界情勢で、どこの国も未来が見えないのですが、日本人は格別に未来を暗くみている。こどもを対象とした調査でそんな結果が最近でたようです。

ヒトの体、胃腸の働きにも脳の働きにも、膨大な期間の経験が書き込まれています。近代化、特に食物や情報伝達で起きた大きな変化の期間は僅か30年です。われわれの体の働きがこれら大きな変化に戸惑っていると、考える方が自然ではないでしょうか。(終わり)

ヒトの体は、過去に経験したことの痕跡、つまり跡ですが、それを多いに残している、これは科学でも認められそうな話題です。色々な経験を体のどこかに残して、進化しているというのです。今の学問ではヒト(ホモ属)は250万年前ころに猿人(アウストリアピカテス属)から分かれたそうです。猿人は480万年前ごろ、類人猿、これはゴリラ、チンパンジーとして馴染みですが、そこから分かれた。そのまえは1500万年前ころ猿から霊長類として分かれた。そういうことになっています。これらは哺乳類と総称されていますが、そのまえは鳥類、さらには恐竜の仲間の爬虫類、両棲類、そして魚の仲間へと分岐の枝は元の方に辿れます。別の目でみるとこういった動物はみなかって海にいた。海から陸に動物が上がってきた。これは古時代のデボン紀の終わりから石炭紀の始め(3億6000万年前)の頃、一億年かけて行われたことです。そのとき動物の体に色々な変化が起きた。単純に言えば空気を大量にとりこむための鰓から肺が発達した。

その鰓から肺への変化の目安になるようなことが、どんな動物の胎児でも起こるとい う主張が三木茂夫さんの「胎児の世界」という本に丁寧に述べられています。三木さん は鶏の卵の中身が変化していく様子を詳しく研究して、4日目の夕方から5日目の昼頃 までに大きな変化が起こることを観察しています。この研究は脾臓というかって増血器 官の状態の変化を追ったものです。両生類であるオオサンショウウオで鰓が退化する時 に脾臓が胃から離れていくという観察があり、それと似たことが、卵で4日目から5日目にかけて起こることを見つけています。又、ニーダムという研究者は、卵の胚の分析で、4～5日目には魚の排泄物アンモニアが、8～9日には両生類の分泌物である尿素が、12日目には爬虫類の分泌物である尿酸がピークになるのを見つけています。簡単にいうと ニワトリが魚から進化してトリになるまでの経過を、卵の中で経験しているということ になります。これはト リという系統の発生が一つの個体の中で見られるという、今、学者 のなかで、定説化しそうになっている考えを具体的に示しています。

人間の胎児では、肉眼観察にとどまりますが、32日から36日にかけて似た変化がおきます。32日にはサメの顔であったのが、34日が魚類から両生類の顔と似ているそうですが、36日には古代の爬虫類に似ているそうです。38日には既に哺乳類に入った感じを三木氏は感じたといいます。受胎40日、そこに現われるのは獣よりヒトの顔と言 えるそうです。これはオモカゲといったもので、人間の赤子の顔は何時現われるのか。70日を過ぎる頃だそうです。三木氏は顔を「おもかげ」という言葉を使って表していま す。この言葉 は原型といった哲学的な意味を含んでいまして、顔という言葉と同じではありませんが、誰にもわかる顔を使いました。

ついでですが、鶏の雛を孵す仕事で、4日前後は大変に失敗が多いとのことですし、人 間の流産も受胎に気付いた直後ぐらいが第一の危険な時期である、という経験も知られ ているところです。

ここで、単純だけれど重大なことをいいたくなります。「生物は過去と無縁ではいられ ない、今、あなたの体の中に過去の記憶が残っている、過去を通り過ぎなければ現在はこな い。過去は消せない、ということす」

ヒトの祖先を250万年前のホモ属誕生まで遡る必要はないでしょうが、現代人ホモ サピエンスの誕生から思ってみましょう。その時期は存外近く2～30万年前のよう ですが、100年に3世代として300、000÷100×3=9、000 世代の反復です。少ない数ではないでしょう。動物としてのヒトの過去が胎児の生長過程に残っているように、ヒトとしての過去が、私の中に皆さんの中に残っていると私は考えたくになります。

▪